月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol. 186



啄木鳥しんきのFalcom日和

ファルコムニュース

英雄伝説 碧の軌跡

いつか貴方とお茶会を

エステルたちと共にリベールを守る
遊撃士協会関係者たちが登場！

『空の軌跡 the 2nd』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

2 目次

4 頼りになる遊撃士協会の仲間たちが登場！
『空の軌跡 the 2nd』

16 ファルコムニュース

20 啄木鳥しんきのFalcom日和

23 英雄伝説 碧の軌跡
いつか貴方とお茶会を
著：むらさきゆきや イラスト：窪茶

空の軌跡 the 2nd
ソラノキセキ ザ・セカンド



遊撃士協会の頼れる仲間たちのビジュアルが到着！ さらに「釣り」&新要素「ビューワーモード」の情報も！

2025年に「軌跡」生誕20周年記念として完全フルリメイクされた『空の軌跡 the 1st』。その続編となる『the 2nd』。今号では、前作でも各地でエステルたちがお世話になった遊撃士協会関係者たちの ビジュアルが解禁。また、シリーズおなじみの「釣り」システムの詳細や、新要素「ビューワーモード」の情報も到着した。

『空の軌跡 the 2nd』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/sora2/

空の軌跡 the 2nd

●ジャンル：ストーリーRPG
●対応機種：Nintendo Switch 2、Nintendo Switch、PlayStation 5、Steam
●発売時期：2026年9月17日
●販売価格
【パッケージ版】通常版：8,800円　Nintendo Switch 2 Edition：8,950円
ウロボロスBOX：13,860円
Nintendo Switch 2 Edition ウロボロスBOX：13,860円
【ダウンロード版】通常版：8,800円
Nintendo Switch 2 Edition：8,950円
Nintendo Switch 2 Edition アップグレードパス：150円
デジタルデラックス版：12,650円　シーズンパス：4,180円
※価格はすべて税込です

アイナ・ホールデン
（CV：鈴代紗弓）

年齢：23歳

リベール王国の遊撃士協会ロレント支部で受付を担当している、優しく落ち着いた雰囲気の女性。
ヨシュアが姿を消してしまった後も、エステルたちの身を案じながらロレント支部で業務をこなしていた。
実は親友のシェラザードをも上回る酒豪で、酒の強さはリベール王国随一というウワサも。



「エステル、新しい仕事用の服もだいぶ板に付いたみたいね。」







ジャン
（CV：伊東健人）

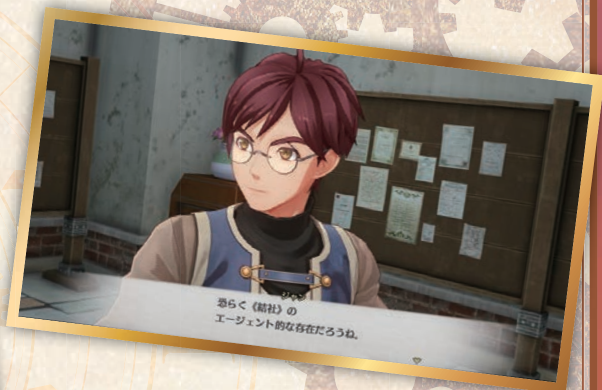
「いや～！早速ジャンジャンバリバリ働いてもらうとしようかなぁ。」



年齢：24 歳

遊撃士協会ルーアン支部の受付を担当している青年。
控えめな印象を受けるが実際はノリがよく、どんな依頼者が相手でも自然にコミュニケーションを取りながら的確に仕事をこなす。
遊撃士アガットとは古くからの友人で、彼がレイヴンのリーダーを務めていた頃も知っている模様。







キリカ・ロウラン
（CV：道井悠）

「そのくらい説明しなくても察してくれると思ったのだけど。」



年齢：27 歳

黒髪と涼やかな表情が特徴的な、遊撃士協会ツァイス支部担当の受付嬢。
優れた洞察力で常に先の事態に備えており、ツァイス地方で起きた事件（the 1st）ではエステル達に的確な指示を出しながら支部全体の動きをコントロールする活躍を見せていた。
同じカルバード共和国出身のジンとは付き合いが長く、彼女自身も東方武術に精通している。







エルナン

（CV：堀金蒼平）

「女王生誕祭を境に何かが起こり始めている……
それは確実に言えると思います。」



年齢：25歳

遊撃士協会グランセル支部の受付を任されている、物腰柔らかで礼儀正しい青年。判断力と現場での指揮能力の長けており、グランセル地方のとある事件（the 1st）では遊撃士メンバーを中心とした作戦を自ら立案するなど事件解決にも貢献していた。
その手腕は同支部所属のクルツをはじめ、多くの遊撃士から高く評価されている。







クルツ・ナルダン

（CV：大海将一郎）

「盛者必滅……精進を怠らぬことだ。」



年齢：29歳

王都グランセル支部に所属する高ランクの正遊撃士。
槍術と東方由来の「方術」を操る実力者として知られているほか、リベール国内の若手遊撃士たちを育成する立場でもある。
正遊撃士に昇格して間もないエステルと経験不足のアネラスを鍛えるため、先輩遊撃士として二人の訓練に付き合うことになる。







カルナ

（CV：天海由梨奈）

「他の国じゃ、遊撃士協会と猟兵団の対立は日常茶飯事なのさ。」



年齢：25 歳

ルーアン地方を活動拠点にしている姉御肌の女性遊撃士。
導力銃によるかく乱・遠距離攻撃や導力魔法（アーツ）による後方支援にも長けており、武術大会ではクルツ、グラッツ、アネラスとチームを組んで出場していた。
王国の事件（the 1st）で暗躍していた結社を捜索するため、再びクルツたちとチームを組むことに。







グラッツ

（CV：畠中祐）

「よう、お二人さん。面白いように引っかかったな。」



年齢：22 歳

ボース支部に所属する正遊撃士で、大剣を武器に先陣に切り込んでいくアタッカータイプ。
さっぱりとした明るい性格で面倒見が良いため、特に子供たちから慕われることが多い。
自慢の大剣を活かした剣技は自己流らしく、技名に自身の名前を入れるという謎のこだわりを持つ。







『軌跡』シリーズといったらやっぱり"コレ"！ 各地で「釣り」をして目指せ爆釣王！

本作では各地にある特定の場所で釣りを行うことができる。釣果は、所持している釣竿とエサの組み合わせによって変わるので、同じスポットでも様々な組み合わせを試してみよう。釣った魚は釣り手帳に詳細が記載されるほか、手帳を埋めていくことで、「リワード」として報酬アイテムもゲットできるので、新たなスポットを見つけたら積極的に挑戦しよう。



やり方その1
エサを投げ入れるポイントを選択



やり方その2
投げ入れた後、タイミングよくボタンを押すとヒット



やり方その3
ボタン押し込みやスティックによる操作を行い、成功すると魚をゲット



新システム「ビューワーモード」でお気に入りのキャラクターを撮影しよう！

本作では新たに、ゲーム内に登場するキャラクターたちを様々なシチュエーションで鑑賞＆撮影することができる「ビューワーモード」が登場。このモードでは、ロケーションやキャラクター、モーション、コスチューム等を選択して、自由にキャラクターを配置させることができる。選択することができるロケーションやキャラクターは、物語の進行に応じて追加されていくほか、ゲーム内で入手したコスチュームやアタッチメント、ヘアカラー等も使用可能になっていくので、新たな場所やアイテムをゲットしたら、更新をチェックしてどんどんと撮影していこう。




英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐!
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる!
激動のクライマックス!


英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価：1000円（本体909円+税）
ISBN978-4-8021-3309-8
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU　©Field-Y

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「京都ザナドゥ」WEB抽選会の応募が絶賛受付中！

『京都ザナドゥ -桜花幻舞-』の発売を記念して、様々な景品が抽選で当たるWEB抽選会の応募が絶賛受付中。応募方法はWEB抽選会ページ内にある専用フォームから回答するだけ！　応募期間は8月17日までとなっているので、忘れずに応募しておこう。





【A賞】
出演キャストサイン色紙（寄書）＋お好きなアクリルお守り：4名



【B賞】
出演キャストサイン色紙（単体）＋お好きなアクリルお守り：26名



【C賞】
アクリルお守り全6種セット：20名



【D賞】
お好きなアクリルお守り1種：150名

WEB抽選会ページ
https://www.falcom.co.jp/kyoxana/special/weblottery/

《Falcom jdk BAND LIVE 2026 OSAKA》開催が決定！チケットも好評発売中！

Falcom jdk BANDのライブが10月3日に大阪で開催されることが決定。大阪での開催は約2年ぶりで、ライブでは「京都ザナドゥ」はもちろんのこと、ライブ初披露となる「空の軌跡 the 2nd」の楽曲も演奏予定となっている。ライブチケットは「e+」で好評発売中となっているので、ライブ特設サイトとあわせてチェックしておこう。



ライブ公演概要
■**公演名**：Falcom jdk BAND LIVE 2026 OSAKA
■**日時**：2026年10月3日(土)　開場17:00／開演18:00
■**会場**：246LIVEHOUSE GABU【大阪】

■**チケット情報**　好評発売中
●料金：¥7,000（税込）　※別途1ドリンク¥600（税込）必要
●座席：ALLスタンディング
●チケット購入：e+(イープラス)
※入場はチケット記載の整理番号順となります（整理番号は購入先着順）

ライブ特設サイト
https://www.falcom.co.jp/jdk/2026osaka/

e+販売ページ
https://eplus.jp/sf/detail/4568540001-P0030001

ねんどろいど「エステル・ブライト the 1st Ver.」の受注がスタート！

グッドスマイルカンパニーの人気フィギュアシリーズ「ねんどろいど」にて、「エステル・ブライト the 1st Ver.」の受注がスタート。予約期間は9月2日までとなっており、期間中は必ず予約することが可能だ。期間終了後は予定数に達し次第受付が終了してしまうので、確実にゲットしたい人は忘れずに予約をしておこう。



商品詳細
■**商品名**：ねんどろいど エステル・ブライト the 1st Ver.
■**メーカー**：グッドスマイルカンパニー　■**価格**：7,800円（税込）
■**発売時期**：2027年1月
■**予約期間**：2026年7月24日(金)～9月2日(水)
■**仕様**：プラスチック製 塗装済み可動フィギュア・ノンスケール・専用台座付属
■**サイズ**：全高 約100mm　■**原型制作**：ねんどろん
■**発売元**：グッドスマイルカンパニー
■**販売元**：グッドスマイルカンパニー





グッドスマイルカンパニー公式ショップ特典

特製台座

https://www.goodsmile.com/ja/product/1141478/



ファルコム電撃ストア特典

2wayアクリルスタンド2種セット（正遊撃士の紋章／準遊撃士の紋章）

https://store.kadokawa.co.jp/shop/g/g7015027013021/

『ドラゴンスレイヤー LEVEL 2.0 PC-8801』がEGGコンソールにてNintendo Switchに登場！

Windows向けのレトロゲーム配信サービスとして展開されているプロジェクトEGGの、Nintendo Switch展開である“EGGコンソール”にて、『ドラゴンスレイヤー LEVEL 2.0 PC-8801』が登場。本作は剣や魔法を駆使して3つ目のドラゴンを討伐。4つの宝冠を持ち帰る名作アクションRPGだ。また本作は、オリジナル版からゲームバランス等が調整された遊びやすいバージョンとなっているので、初めてプレイする人にもぜひとも挑戦してみてほしい。



製品情報
好評配信中
■**タイトル**：ドラゴンスレイヤー LEVEL 2.0 PC-8801
■**価格**：880円（税込）
■**メーカー**：D4エンタープライズ
■**対応言語**：日本語、英語

Nintendo Store
https://store-jp.nintendo.com/item/software/D70010000128150




FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！　新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
ふぁるこむコミックざんまい
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp


『英雄伝説 閃の軌跡』のアリサたちが魔法少女に⁉
脚本家・山下憲一（TV アニメ『みんな集まれ！ファルコム学園』）と漫画家・さがら梨々（コミック『閃の軌跡』）の強力タッグが贈るシナリオブックが登場！　平穏な日常に突如現れた怪物。その時、アリサのキーホルダーが不思議な光に包まれて……⁉
あなたにお届け！
愛と希望の流れ星！
魔法少女
まじかる★アリサ
決定稿
著：山下憲一
イラスト：さがら梨々
原作：日本ファルコム
好評発売中！
判型：A5正寸／ページ数：160／定価：1,300円（税別）／ISBN978-4-8021-3131-5
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©KENICHI YAMASHITA,RIRI SAGARA 2018 ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks

■それまでは ちゃんと早めに 帰っていた。



…なので 探索ラストの ワクワクタイムと化してる(笑) 楽し。

啄木鳥しんきの Falcom日和



京都ザナドゥ！
とにもかくにも セナちゃんがかわいいのと カズ兄の気合の入った声が 好き。
幻素中毒が恐ろしくて、でももっと探索させてぇ～と唸ってたんだけど、つい先に行きたくて、
ぎりぎりまで粘ってみたら、なんかめっちゃ楽しくなってしまった(笑) さてと、迷宮に潜りますよ。

特務支援課のゆる~い(?)日常第２弾！

意外なキャラクターたちも続々登場！

英雄伝説 碧の軌跡

~いつか貴方とお茶会を~

第3回



エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。その主人公を務めるロイド・バニングスら特務支援課メンバーと、彼らとともに壁を乗り越え続けた仲間たちの「あったかもしれない」ゆる~い日常の日々を描いた外伝小説の第２巻！「あのキャラとあのキャラが!?」と思わずにはいられない意外な組み合わせも続々登場の一冊をご堪能あれ！

製品情報

好評発売中

著　　　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　　価：1,210円（税込）

ベネットの指示に従い、小麦粉を持ってきたり、水を汲んできたり。
「うん、バターロールパン、焼き上がり！　ロイドさん、持っていってもらえますか？」
「わかった」
トレーに積んで、厨房を出る。
早くもレジには客が並んでいた。
エリィがこちらに気付いて、声をかけてくる。
「おつかれさま、ロイド。ちょっとお願いできるかしら？」
「ああ」
レジにエリィと並んで入って、パンを紙袋に入れる手伝いをする。
ニコニコした老婦人が。
「おや、珍しいわね。ロイドさんにエリィさんじゃないの」
「ちょっと事情がありまして、今日は俺たちが手伝いに入ってるんです」
「そうなの、大変ねえ」



「いえ……お待たせしました」
パンを入れた紙袋を渡す。
また次のお客さんのパンを紙袋へ。
これだけ大勢の人たちに無駄足を運ばせることにならなくてよかった。
そうしていると、エプロンドレス姿のクローディア姫が、レジにやってきた。
「あの！」
「ん？」
「注文を受けたんです！」
瞳を輝かせて、頬を上気させていた。
当然、オープンカフェでウェートレスをしているのだから注文は受けるだろう、と言うのは無粋だ。
なんせ、彼女は生まれて初めて注文を受けたのだから。
「わかりました。何を出せばいいですか？」
「カフェオレ、砂糖を多目です。それと、オレンジジュース。あと、オススメの焼きたてパン」
「やり方は聞いてありますから、やってみます」
「ええ、お願いします」
クローディア姫が客席に出ていく。

キャ～～～⁉　と黄色い歓声があがった。
ユリア准佐が注文を取りに行ったところ、女性客が騒ぎだしたらしい。
まさか、もうユリア准佐だとバレてしまったか⁉
女性客のひとりが尋ねる。
「あの！　あの！　リベール王国のユリア・シュバルツ准佐に〝似てる〟って言われませんか⁉」
「ッ⁉　そ、そうですか……どうでしょうか？　あまり似てないと思いますけど……」
「え～っ、似てますよ～‼」
「……困ったな」
あのユリア准佐がたじろいでいた。
髪型など変えて変装しなくていいのか尋ねたとき――クローディア姫ならともかく、異国で自分のことを気に掛ける者などいるまい、と笑っていたが。
黒服のユリア准佐は、主に女性客に大好評だ。
お客さんたちは、まさか本物だとは夢にも思っていない様子だった。
クローディア姫のほうも、男性のお客さんたちから。
「似てるって言われない？」
と訊かれていたが……
「よく言われます。でも王太女がカフェで店員をしてたら、びっくりですよね」
そう笑って返していた。
たしかに、改めて見ると、びっくりだ。

レジに並んでいる客がいなくなったので、俺は厨房へと戻った。
「こんな感じですか？」
「そうそう」
リースが、ベネットからパン作りを教わっていた。
「あれ？　パンを作るのは任せられないんじゃ？」
「試しに形を作るのをやってもらったら、リースさん、すごく上手いのよ」
「簡単なものしか無理ですが……」
「それでも、充分に助かるわ」
「順調そうだな。よし、俺は、他に何したらいい？」
「あ、倉庫からミルクを運んできてもらえますか」
「わかった」
しばらく厨房でパン作りの手伝いをしていた。

ふと外が騒がしいことに気付く。
ベネットが首をかしげた。
「なにかあったかしら？」
「見てこよう。ちょうどパンも焼けたしな」
俺は厨房の扉を開いた。

明らかに人の声が多くなっている。
なんとカフェに座りきれないほどの客が来ていた。
「どういうことだ……!?」
「あっ、ロイド！　カフェのほうを手伝ってちょうだい！」
エリィの声から余裕が消えている。
レジを待っているお客さんの人数も、明らかに増えていた。
オープンカフェへ視線を向ける。
三つのテーブルの六人から、ユリア准佐に次々と注文の声が飛んだ。
「私は、カフェオレ」
「えっと、アタシは、カフェモカで」
「あの～あの～オレンジジュースとドーナッツ。あ、やっぱり、ホットコーヒーとフレッシュサンドで」
「こっち、ベルベリージュースね。あと、ベーコンレタスサンドのレタス抜き」
「ミルクロールと……クロワッサンにしようかな～。ドーナッツがいいな。うん。それでお願いします」
ユリア准佐がうなずく。
「そちらから――カフェオレ、カフェモカ、ホットコーヒーとフレッシュサンド。ベルベリージュースとベーコンレタスサンドのレタス抜き、ミルクロールとドーナッツですね。少々、お待ちください」
おお～、と歓声さえあがった。
さすがはユリア准佐だ。
クローディア姫がレジに戻ってくる。
「ふぅ、ウェートレスって大変なんですね。行ったり来たりが……」
「そうみたいですね」
「どうしてかしら？　男性のお客さんって何人かで来ても、一度に注文しないで、ひとりずつ頼むことがあるんですね。とくに二杯目のとき」
「ああ、なるほど……」
それは、おそらく、クローディア姫に（よく似たウェートレスだと思っているはずだが）何

度もテーブルに来て欲しいからだろう。
「お疲れじゃありませんか?」
「いいえ、なんだかダンスか剣術の稽古みたいで楽しいです。最近、飛行船に乗っているか、ホテル暮らしばかりでしたからね。呼ばれたら、あちらへこちらへ、行ったり来たり」
本当にうれしそうに話す。
俺はうなずいて聞いていた。
また呼ばれて、クローディア姫が小走りに出ていく。
「はい、ただいま!」

陽が西に傾きかけた頃、オスカーから連絡が入る。
ちょうど、俺が倉庫から小麦粉を持ってきて、リースが水を汲んできたときだった。
ベネットが厨房に持ってきておいた導力通信機に飛びつく。
小麦粉で真っ白になった手のまま。
「はい!」
『俺だ。そっちはどうしてる?』
オスカーの声が漏れてきた。
あちらに見えているわけではないけど、ベネットが胸を張った。



「ちゃ〜んと店は開けてるし、新記録ってくらい繁盛してるわよ！」
『えっ、開けてるのか⁉』
オスカーの驚いた声に、ベネットがうれしそうな顔をした。
「当然よ」
『ロイドたちに手伝ってもらってるのか？』
「うっ……まぁ、そうだけど……」
『そうか。ちゃんとお礼、するんだぞ』
「言われなくてもわかってるわよ！　子ども扱いしないで」
『ああ』
「……それで、父さんは？」
『それがなぁ……』
「…………」
『なんか、東方から来てる先生がいて、ひっぱったり、もんだりしてもらったら、ほとんど痛みが引いたらしいんだ』
「えっ⁉　ホント⁉」
『しばらくは休養が必要らしいけどな。今日にでも導力バスで帰れそうだよ』
ベネットが涙ぐんで目元をぬぐう。
顔が小麦粉で白くなった。
「よかった……ホント……よかったよ〜」
『ああ、まったくだ。しばらくは、俺とふたりになるけど、まぁ、がんばろうぜ』
「うん」
『じゃあ、これから帰る』
「……まってる」
ベネットが涙声で、うなずいた。
俺はリースと顔を見合わせて、互いに笑みを浮かべるのだった。

オスカーとモルジュが戻ってきたのは、七時近く。
一番、店が混雑している時間だった。
そんな最中にウェートレスやレジ打ちが抜けるわけにはいかない。
結局、お店が閉まる八時まで、お手伝いを続けた。
クローディア姫とユリア准佐（によく似たウェートレス）のおかげで、いつにも増して来客が多かったのも一因だったたが。

閉店後――

モルジュをベッドに寝かせたあと。
オスカーとベネットが深々と頭をさげる。
「ありがとうな、ロイド！　本当に助かった！」
「ありがとうございました‼」
「いや、今回は俺じゃなくて、クロ……クローゼさんに、お礼を言ってくれ。言い出したのは彼女だから」
クローディア姫が手を左右に振る。
「そんな！　私なんて素人ですからお役に立てたかどうか。それより、こんな貴重な体験をさせてもらって、本当に感謝しています。どうか、面（おもて）を上げてください」
おもて？
ユリア准佐が、コホンと咳払いする。
「少々、時間が遅くなりました。もう帰りませんと」
「そうですね。名残惜しいけど……」
「あの……これ、たいした額じゃないんですけど……」
ベネットがアルバイト代を払おうとしたが、クローディア姫が首を横に振る。
「本当に、私のほうがお礼したいくらいなんです。だから、そういうのは、お気持ちだけで大丈夫ですから」

リースも辞退する。
「シスターがアルバイトするのは問題がありますので」
「俺たちも警察官だからな」
実績に応じて報酬は支払われるが、それは警察本部からであって、助けた市民からではない。
戸惑ったようにベネットがオスカーを見る。
うーん、と彼は考えてから。
「気持ちか……それじゃあ、これは受け取ってもらえないか？　売れ残りで申し訳ないんだが」
紙袋いっぱいにパンを入れる。
これには、クローディア姫も笑みを浮かべた。
「うれしいご褒美です。ありがとうございます」
リースもご満悦。
「うん……もしゃもしゃ……美味しいです。ありがとうございます」
早くも食べていた。
みんなの頭に汗マークが浮かぶ。
苦笑しつつ、俺もありがたくオスカーからパンを受け取った。
「支援課のみんなと分けさせてもらうよ」
エリィもうなずく。

別れ際はオスカーが笑顔で片手を振り、ベネットが何度も頭を下げた。

翌日──

リベール王国のクローディア・フォン・アウスレーゼ王太女を見送る式典が催された。

例によって、俺はエリィと式典に呼ばれている。

クロスベル空港の式典用のスペースに、ずらりと並んだ参列者たち。その末席に、俺たちは立っていた。

高速巡洋艦《アルセイユ》へ乗りこむ前のクローディア姫を記者たちが囲んでいた。

無数のフラッシュが浴びせられている。

彼女と昨日、街を歩き回ったなんて、自分の記憶が嘘みたいだ。

大勢の記者のなかで、うまいこと陣取って質問を投げたのはクロスベル新聞（タイムズ）のグレイス記者だった。

「殿下、クロスベルの街をご覧になりましたか？」

「はい。とても活気があり、困難に立ち向かう力がある……若々しい街だと思いました」

「そのなかで、一番印象深かったのは？」

「どこも大変素晴らしく……」

そこまで言ってから、ふとクローディア姫が参列者に視線を巡らせた。

目が合った、ような気がした。

気のせいかもしれない。

しかし、彼女が微笑んだのは間違いない。

ユリア准佐まで、そっと口元を緩める。

クローディア姫がやわらかい笑みをうかべ、それから唇を開く。

「パン屋さん……そう、クロスベルの街のパン屋さんが印象的でした」



第3話
『フランとマフィアとラーメン屋台』

クロスベル警察に新設された特務支援課は、市民からの支援要請を受け、それを解決することを目的としている。
市民との窓口になってくれているのが、フラン・シーカーだった。
「あ、ロイドさん！」
カウンターのなかで書類を整理していた少女が顔をあげ、親しみのある笑みを浮かべる。
ピンクブラウンの髪をツインテールにまとめ、ちょっと間延びした平和そうな声をしている。
名前を呼ばれ、ロイドは片手を挙げた。
「やあ、近くまで来たから、報告に寄らせてもらったよ」
ロイド・バニングスは特務支援課のリーダーだ。
他の仲間たちも来ている。
フランが笑みを向けて。
「皆さんも、お疲れ様です～」
特務支援課の面々が、それぞれに返した。
ロイドは済ませたばかりの支援要請について報告する。
「――というわけで、それほど大変じゃなかったよ。他に要請は来てるかな？」
「はい。緊急というわけではないですが、街道に大型の魔獣が出たそうです。余裕があれば、お願いします」

「わかった。今から行ってみるよ……最近、こういう要請が増えてきた気がするな。魔獣が増えてるのか？」
「そうですね～。前は特務支援課が有名じゃなかったから、街道の魔獣とかは警察じゃなく、遊撃士協会（ギルド）とか、警備隊に相談してたんじゃないでしょうか」
「ああ、そうかもしれない。知名度が上がってきて頼ってもらえるようになったなら、いいことだな」
「本当ですね。わたしも受付として、嬉しいかぎりです～」
ロイドたちが会話を切り上げようとしたとき、ちょうど別の警察官がやってきた。
金髪の青年で、柔和と軟派の間くらいの笑みを見せる。
捜査官のレイモンドだ。
「おや～、特務支援課の皆さんじゃないか。おひさしぶり」
「こんにちは。レイモンドさん」
ロイドが挨拶すると、仲間たちも会釈した。
「君たちも、たまにはどうだい？」
レイモンドが口元でグラスを傾ける仕草を見せる。
ロイドは少しだけ考えて。
「飲み会（パーティー）ですか？」

「そう！　まぁ、未成年者もいるから食事会（パーティー）だけどね。警察署内の親睦を深めようってことで、捜査二課のメンバーが中心だけど、他の課も大歓迎だよ～？」

「なるほど……お誘いは嬉しいんですが……たった今、支援要請を受けたところなもので。すみません」

「ああ、そうなのか。支援課、すごく頑張ってるみたいだね」

「困ってる人たちの役に立ててるならいいんですけど」

「街の外の魔獣まで退治するんだって？　支援課って本当に何でもやるんだね」

「はい。支援要請を受ければ……だから、今日は街に戻るのが遅くなるかもしれないので」

「そういうことなら仕方ないな～」

　レイモンドが視線を転じて、フランのほうへ声をかける。

「フランちゃん、今夜、どう？」

「残念ですが、今日は先約があるんです！」

　申し訳なさそうにしつつも、先約って言葉のあたりで、にんまりと表情が緩んでいた。

　頬を染めたりして。

　レイモンドが目を丸くする。

「ありゃ……なんか、すっごく嬉しそうだね。も、もしかして、フランちゃん、恋人ができちゃったりしたんじゃ⁉」

「あはは、そんなのできませんよ～」

　ぱたぱたと彼女は手を左右に振った。

「それじゃあ、先約って？　あっ、いや、話せたらでいいんだけどさ」

「べつに隠すことじゃなくて、今夜は、お姉ちゃんとデートなんです！　うふふっ」

「ああ……」

　レイモンドが疲れた顔をして肩を落とした。

　聞いていたロイドも汗をたらす。

　いつも笑顔がかわいいフラン・シーカーは警察署内でも人気の婦警さんだ。

　しかし、自他ともに認めるお姉ちゃん大好きっ子であり、警察署内に知らぬ者なしというほどだった。

「まぁ……フランちゃんは、そうだよね……」

「そうですよ～」

　レイモンドのぼやき声に、フランが嬉しそうにうなずいた。

　そのとき、受付に導力通信が入る。

　手が空いていた同じ受付嬢のレベッカが受話器を取った。

「こちらクロスベル警察…………はい……はい。ただいま替わります」

　レベッカが、フランに受話器を差し出してきた。

「え？　わたしですか？」
「はい」
　受話器を受け取り、耳に当てたフランが、ひときわ表情を明るくする。
「お姉ちゃーん⁉　なに？　どうしたの？　今夜が待ちきれなくなっちゃったの？　わたしも待ちきれないよ～」
『…………ごめん、フラン』
　かすかに導力通信ごしの声が漏れてきた。
　フランが愛してやまない姉のノエル・シーカーの声だった。
　ただし、いつもは凛として明るい彼女が、なにやら暗い声をしている。
『……急な任務が入っちゃって』
「えっ⁉」
『この埋め合わせは、次の休暇に絶対するから。ごめんね！』
「お、お姉ちゃん、待って！」
『もう集合の時間なの！　それじゃ――』
　逃げるように導力通信が切断された。
　どうやら、今夜のフランのデートはキャンセルされてしまったらしい。
　固まっている彼女の手から、レベッカがそっと受話器を取り、導力通信機に戻した。

　何事もなかったかのように。
　いつもクールなレベッカである。
　逆にいつも賑やかなフランが、らしからぬ脱力っぷりで、つっぷす。
「うわーーーん‼」
「……なんと言っていいやら」
　ロイドは困ったように頬をかいた。
　仲間たちも肩をすくめて、弱り顔だ。
　ノエルは警備隊の曹長であり、まだ若いのに実力を高く評価されている。急な任務が入るのも信頼されていればこそだった。
　わかっているから、ノエルを悪くは言わないフランだったが、すっかり落ちこんでいた。
　重たい空気に耐えかねて、レイモンドが逃げだそうとする。
「あ～そうだ、報告書を出しておかないといけないんだ。それじゃあ！」
「レイモンドさん！」
　フランに呼ばれて、足を止めた。
「え、えっと……なんだい？」
「わたし、今夜、行きますから！　食事会（パーティー）！」
「え？　あ、ああ、そう⁉　じゃあ、六時になったら声かけるよ」

「はい。もう嫌なこととか忘れて楽しんじゃいましょ～」
　ぐっと拳を握る。
　切り替えが早いというか。前向きだなあ、と感心するロイドだった。



　ちょっとラッキーだったかな――とレイモンドは思っていた。
　ノエルの都合がつかなくなったのは、フランには残念なことだったが……おかげで、人気者の彼女を誘えたのだから。
　フランは物腰がやわらかくて話しやすいし、なにかと気が利くし、なんといっても美人だ。
　親睦のための食事会は華やいだ雰囲気になり、楽しい時間を過ごすことができた。
　予定を二時間ほど過ぎて解散となったものの、盛り上がったからと思えばなんでもない。
　繁華街のレストランから出ると、すっかり周りは暗くなっていた。
　上司のドノバン警部が声をかけてくる。
「おい、レイモンド」
「あ、はい。なんですか、警部？」
「フランを送ってやれ。どうも、酔っ払ってるみたいだから」

「えっ⁉　フランちゃんは未成年ですよね⁉」
「グレープフルーツジュースを注文したが、店員が間違えてカクテルを出しちまったらしい。気付かないで飲んじまうなんて、フランらしいけどな」
「あらら……まぁ、飲み慣れてないと、逆にわからないですよね」
「それに、いくら警察官といっても、こんな夜更けに女の子をひとりで帰すもんじゃないからな」
「僕が送るんですか？」
「まるっきり逆方向ってわけでもないだろ」
「たしか、東通りでしたっけ？」
「じゃあな、任せたぞ。俺は仕事が残ってるから警察署に戻る」
「えっ⁉　もう真っ暗ですよ」
「日が昇るまでには終わるだろ。それとも、おまえが書類を片付けてくれるってのか？　そうしたら、俺がフランを送っていくが」
「フランちゃんを送っていきます！」
「うむ」
　その彼女はどこにいるのか、と左右を見渡すと、ふらふらとおぼつかない足取りで、帰っていくところだった。
　よりによって治安の悪い裏通りへ！

「わわっ、待った！」

　追いかけていって、腕をつかむ。

　彼女はいつもの笑顔を向けて。

「ん～？　あれ～、レイモンドさん？」

「フランちゃん、この時間に裏通りはマズイよ。行政区のほうから回ろう」

「あはは、そうですね！」

　彼女は鼻歌まじりに歩きだす。

　間違えて一杯だけ飲んだらしいが、けっこう酔ってるなぁ――と思いながら、レイモンドは並んで歩いた。

　足取りはしっかりしている。

　妙に上機嫌に見えるが、たまに受け答えがおかしかった。

　行政区から中央広場に港湾区に出たところで――

「ラーメン食べたい」

　フランがつぶやいた。

「え？」

「ほら、あそこに屋台がありますよ、レイモンドさん」

「本当だ。こんな時間でもやってるんだね～」

「これはもう、行くしかありません！」

　言いながら歩いて行く。

「ちょ……ちょっと待ってくれよ、フランちゃん」

「え～、なんですか？　いいですよ、わたしだけ食べていきますから、レイモンドさんは先に帰ってても」

「そんなことしたら、僕がドノバン警部に怒られちゃうよ」

「それじゃ、仕方ありませんね～」

「わかってくれたか」

「ふたりでラーメン食べていきましょう！」

「譲らない!?」

　やっぱり、彼女はちょっと酔ってるみたいだった。

　ひとりにはできないので、レイモンドは観念して夜のラーメン屋台に向かう。

　暖簾をあげて、フランが中央の席に座った。

「こんばんは～」

「ヘイ、らっしゃい」

「ラーメンください！」
「ふたつ？」
　店主に尋ねられて、彼女の左隣に腰掛けたレイモンドはうなずいた。
「はい。できれば、すくなめで……」
　横合いから、野太い声が割りこんでくる。
「大盛りだ！」
　デカイ男だった。
　暖簾をくぐるなり、注文し、同時にレイモンドの左側に腰掛ける。
　角張った顔と、普通の男の倍くらいありそうな肩幅。
　背広を着ていてもわかるほどの筋肉。
　レイモンドは目を丸くした。
（……!?　こ、この男は……!?）
　ガルシア・ロッシ！
　自治州クロスベルで一番の勢力を誇るマフィア《ルバーチェ商会》を取り仕切る巨漢の若頭だった。
　かつては猟兵として戦場で勇名を馳せ《キリングベア》の異名で呼ばれた男だ。
　捜査一課でトップクラスの要注意人物に挙げられているガルシア・ロッシ。

　その隣でラーメンを食べることになるとは。
　店主が「ヘイ、大盛りひとつ」とうなずいて料理をはじめる。
　レイモンドはかつてないほど背筋に冷や汗をかいた。
　フランが楽しそうに笑う。
「あはは、大盛りだなんて、すごいですね～」
「ん？　ああ、忙しくて飯を食べる暇もなかったんでな」
　縮こまってるレイモンドの頭越しに、上機嫌なフランと、キリングベアが会話していた。
　レイモンドは心臓が止まるかと思った。
（まさか、フランちゃん、気付いてないのか……!?）
「おじさん、熊さんみたいに大きいですもんね～」
　レイモンドは気を失うかと思った。
　あのガルシア・ロッシを〝おじさん〟呼ばわりで、しかも〝熊〟である。
　たしかに、熊のようにデカイが。
　この熊は人食い熊だ。
　ガルシアは鼻を鳴らして。
「フンッ……おじさんかよ。まだ老けこんだつもりはねえが」
「そうなんですか。おいくつなんですか？」

「42歳だ」
「じゃあ、わたしから見たら、おじさんですよ～。お父さんと同じくらいですから！」
「ほう。嬢ちゃん、幾つだ？」
「今年で17歳になりました～」
「25も離れてるのか……まぁ、たしかに、おじさんだな」
「うふふっ……お父さんが生きてたら、こんな感じだったのかな～」
　レイモンドは黙って首を横に振った。
　いくらなんでも、キリングベアと同じ巨漢が、そうそういるはずもない。
　ガルシアが声を小さくして。
「そうか……父親を亡くしてんのか。そいつは、寂しいやな」
「あ……はい……でも平気です！　お姉ちゃんがいますから。わたしのお姉ちゃんは、すごいんです。警備隊の曹長なんですよ」
「ほう？　そいつは頼もしいな」
「わたしのことも、クロスベルの街も守ってくれるんです。悪い人なんか、やっつけちゃいますよ～」
　フランが拳をにぎって、ぶんぶん振り回す。
　ゴッとレイモンドの頭に当たったが、気付いてない様子だった。
　ガルシアが獰猛な牙を見せて笑う。
「ククク……そいつは、本当に頼もしいな」
　レイモンドは内心で悲鳴をあげていた。
（早く帰りたい！）
　ラーメンのいい匂いがしてきた頃、四人目の客が現れた。

「お隣、よろしいでしょうか？」
　暖簾をくぐり、フランの右隣の席を指さしたのは、細面で眼鏡をかけた青年だった。
　切れ味の鋭いナイフのような印象。
　フランがにこやかにうなずく。
「はい。空いてますよ～」
「どうも……」
　レイモンドは目を皿のようにして見つめた。
　肩が震える。
　屋台の明かりに照らされた青年の顔に、はっきりと見覚えがあった。

　ガルシア・ロッシと同じく要注意人物としてファイルに載っている。
　東方風の意匠を施した服装からしても間違いないだろう。
（ツァオ・リー⁉）
　共和国の東方人街に本拠地を構える巨大犯罪組織《黒月（ヘイユエ）》の幹部であった。
　屋台の店主が尋ねる。
「らっしゃい。なんにしましょ？」
「ネギラーメンをひとつ」
「ヘイ、ネギラーメンいっちょ。もうすぐ出来ますんで」
「はい」
　フランが嬉しそうに声をあげる。
「うわ〜、美味しそうな匂いがしてきましたね。これこそ、ラーメンですよね！」
　話しかけられて、ツァオは一瞬だけ意外そうな顔をしたが、微笑んでうなずいた。
「ええ、私の祖国とは味付けが違いますが、食べてみると、これがなかなか。今では、すっかり常連です」
「おおっ、楽しみですね〜。わたし、今日が初めてです！」
「なるほど……お仕事のお帰りですか？」
「はい！　あっ、パーティーやった後なんですけどね。もうすぐクロスベル創立記念祭じゃないですか」
「ええ」
「警察は警備で忙しくなるから、今のうちに騒いで、やる気を出しておこうって感じなんです」
「なるほど……警察の……そうですか」
「知ってますか？　最近、また悪いトコが増えて、もう大変なんですよ〜」
　レイモンドが声にならない悲鳴をあげる。
　その〝増えた悪いトコ〟のボスが、今、フランの横にいるツァオだ。
　当人は気付いているだろうに、笑みを崩さない。
「ふふっ……すぐに片方は消えると思いますよ」
「だといいんですけどね〜。まぁ、みんな、記念祭を楽しみにしてるから、平和だといいんですけど」
「とても楽しみですね」
　ツァオが含みのある表情を浮かべた。
　視線を横に流す。
　フランとレイモンドの向こう――ガルシアが不敵な笑みを返した。
「片方が消えるか？　そうだろうな。この街は、共和国のようにはいかねえってことだ」
「井の中の蛙は大海を知らず、といったところですね」



「てめぇ……」
「フッ……」
キリングベアと《黒月(ヘイユエ)》幹部の緊張が高まる。
そこに、どんぶりが出てきた。
「ヘイ、ラーメンお待ち！　お嬢ちゃんのぶんと、お兄ちゃんのぶんと、旦那が大盛り。お兄さんがネギラーメン」
「きった～～～!!」
フランが両手を挙げてバンザイした。
気勢を削がれ、ガルシアもツァオも闘気を収めた。
屋台の割り箸は、木製の箸箱に入っている。
普通の店のような筒に収めた形だと、砂埃などが溜まってしまうからだ。
その蓋付きの箸箱に、ガルシアとツァオが同時に手を伸ばした。
互いに端をつまんで睨み合う。
「ククク……俺が先に掴んだようだぜ？」
「ご冗談を。先だから、なんだと言うんです？　より強い者が次代の覇者になるのですよ」
「そうか？　じゃあ、残るのは俺のほうだな」
レイモンドは双方の闘気に押しつぶされそうになる。

呼吸さえままならない。
今、この場所から、クロスベル市の裏組織同士の全面戦争になるのではないか――とさえ思った。
無意識にテーブルの下でＥＮＩＧＭＡ（エニグマ）――戦術オーブメントのうち第５世代のものを指す。
通信機能も備えている――を手に取った。
ラーメンを食べる振りして、声を絞り出す。
「た……たすけ……」
「あははっ、なにやってんですか。お箸は、ここを開けて取るんですよ～？」
ガルシアとツァオが掴んでいる箸箱の蓋を開けたのは、フランだった。
四本の割り箸を取りだして。
「はい、まず年長者の熊さんから」
「……あ、おう」
ガルシアは箸箱から手を離し、割り箸を受け取った。
彼の巨大な手に持たれると、箸が小さく見える。
次にフランは右隣へ。
「はい、どうぞ」
「フフ……ありがとうございます」

「レイモンドさんも」
「あ、ありがとう……」
弱々しく震える手で割り箸を受け取った。
正直、ラーメンを食べられるような精神状態ではなかったが、変に目立つのも恐ろしい。
レイモンドは息を殺してラーメンに口をつけた。
フランは気付いていない様子で、楽しげにおしゃべりしている。
「熊さんといえば……うちに熊のぬいぐるみがあるんですよ。お姉ちゃんと色違いでお揃いなんですけど」
「そうなのか」とガルシア。
「かわいらしいですね」とツァオ。
なぜか、ふたりとも付き合いよく彼女の話に耳を傾けていた。
「わたしのが、白色でバンバンなんです！」
「……バンバン？　なんで鉄砲の話になったんだ？」
首をかしげるガルシアに対して、ツァオは苦笑して。
「ぬいぐるみの名前ですね？」
「そうなんです～。お姉ちゃんは恥ずかしいからって名前をつけてないみたいなんですけど」
「ふんっ、そういうことか」

「フフ……鉄砲」
　冷笑したツァオに、ガルシアが歯噛みする。
「ぐっ」
　反撃の言葉も浮かばなかったらしく、自棄（やけ）のようにガルシアがラーメンをすすりはじめた。
　すごい勢いだ。
　フランが目を丸くする。
「おお、すごいですね！　さすが熊さんですね〜」
「ふんっ、メシを食べるから力が出る。そして、メシは食べられるときに食べておく……それが生き残るためのコツだ」
「なるほど。なんか、たくさん食べる男の人ってカッコイイですよね〜」
「………腹が減ったから食べてるだけだがな。おい親父、替え玉だ」
「ヘイ、今すぐ」
　ガルシアが、ツァオを横目に鼻で笑う。
「ククク……まぁ、そろばんばかり弾いてるヤツには、ネギが似合いだな」
「フッ……店主、激辛十倍を」
「ヘイ、激辛十倍で」
「むっ⁉　おい親父、こっちは二十倍だ！」

「ヘ、ヘイ」
「では、三十倍で――」

　辛みが目に沁みるような赤々としたラーメンが出てきた。
　口に運んだガルシアが固まる。
「ぬっ⁉」
「むむ……いや、これくらいは……」
　辛さについてはツァオのほうが慣れているか。それでも、指先が微かに震えていた。
　レイモンドはまだ最初のラーメンが半分も減っていない。
　フランもおしゃべりばかりしていた。美味しそうに食べてはいるが、どこまでもマイペースだ。
「もうすこししたら、この辺も記念祭で賑やかになるんでしょうね〜。今はエルム湖の水の音ばかりですけど」
　今はラーメンをすする音がしているんじゃないかな？　とレイモンドは心の中でツッコミを入れた。

「わたし、お姉ちゃんとパレードを見に行こうと思ってるんですよね～……ふふっ……でも、ロイドさんも誘っちゃおうかな～？　なんて。ちょっと大胆発言ですかね⁉　きゃ～」
レイモンドの背中を、ばしばしと叩いてきた。
「げほっ！　げほっ！」
ツァオが目をすがめる。
「ロイドさん？　それは……特務支援課の？」
「あ、はい！　ご存知なんですか？」
「ええ……少しだけお話したことがありまして。もしかして、浅からぬ仲なのでしょうか？」
「えっ⁉　あははっ、そんなんじゃないですよ～。でも、お姉ちゃんとは、どうなのかな～って思ってるんです。わたしから見ると結構相性が良さそうな感じなんですけど……でも、エリィさんもいるしな～」
「ほほう……なかなか、ロイドさんも隅に置けませんね」
ガルシアが水を片手につぶやく。
「ふんっ、あの小僧か……気の多いところは兄貴に似なかったようだな」
捜査と関係ないところで特務支援課と裏組織との溝が深まった気がするレイモンドだった。
もともと、警察組織とマフィアとでは犬猿の仲だが。
フランがガルシアとツァオに尋ねる。
「みなさんは、記念祭はどうするご予定なんですか？」
「俺は仕事があるんでな。毎年、記念祭はミシュラムだ」
「おおっ、いいですね～ミシュラム！　一番の人気スポットじゃないですか！」
「仕事だから、お遊び気分じゃいられねえのさ。なんせ一年の半分近い稼ぎがあるんでな」
レイモンドは心拍数が上がるのを感じた。
マフィアが記念祭で何やら大きな取引をしているらしい、という噂は聞いたことがあったが……。
本当だったのか。
しかも、ミシュラムで。
知ったところで捜査二課の自分では、どうしようもないし、どうせ捜査一課の連中は知っていることなのだろうけれど、クロスベルの闇を垣間見た気がしてレイモンドの肌が粟立った。
ガルシアは〝知ったところで警察には何もできまい〟と思って口にしているのだ。
ツァオも水で喉を冷ましてから。
「私は初めての記念祭なので、今回は観光を楽しもうかと思っていますよ」
「わ～、いいですね～」
「フフ……まぁ、仲間がどうするかは、わかりませんが」
ガルシアが牙をむいた。

「ふんっ、なにやらネズミがチョロチョロしてやがるようだがな。どうせ何もできやしねえ」
「さて、それはどうでしょうか？」
　レイモンドは緊張を高めた。
（記念祭にルバーチェ商会と黒月（ヘイユエ）の衝突が!?）
　多数の観光客で賑わうクロスベルで、抗争事件など起きたら、大変だ！
　やはり、警察官として、看過できない。
　レイモンドはカウンターの下でエニグマを握りしめた。
　使命感を持って声を絞り出す。
「……た……たすけ……て」
　精一杯だった。
　見ないで操作したので、ちゃんと連絡できているかわからない。
　そもそも、自分の居場所さえ伝えていないので、どんな意味があるのか。
　その間にもガルシアとツァオは口調こそ穏やかなものの、睨み合っていた。
「新参者が何をしたところで、この街は変わらねえ。どっかの小僧たちと同じだ」
「私は、彼らにも期待していますよ。大きな障害であろうとも打ち破るだけの力がある、と感じています……まぁ、その前に我々が変えてしまうかもしれませんがね」
「ククク……でかい花火でもあげようって腹か？」
「……正直、ここまで来ておいて、何もしないということはありえませんよ。我々は、そこまで優しくも悠長でもない」
（やはり、なにかあるのか!?）
　レイモンドは恐ろしくなってきた。
　フランが腰を浮かせてはしゃぐ。
「おおっ、花火ですか!?　あげちゃいますか！　大きいの、どかーんって、やっちゃいますか～。いいですね～」
　わずかに驚いた顔をしたツァオだったが、肩を揺らして笑った。
「フフフ……そうですね。せっかくのお祭りです。せいぜい楽しく盛り上げないと、わざわざ異国から来た意味がないというものです」
　ガルシアがキリングベアの笑みを浮かべていた。
「上等だ。何をしようとも、この街を仕切ってるのは俺たちだってことを思い知らせてやる」
「フフ……」
「ククク……」
「おおっ、いいですね～。お祭りらしく盛り上がってきましたね！」
　フランがグラスを片手に掲げて。
「よし！　乾杯しましょう！　記念祭の前祝いってことで！」

「……いいでしょう。これも、なにかの縁」
「ふんっ……おい親父、一杯くれ」
「ヘイ、わりゃした！」
　レイモンドは消えそうな声で頼む。
「あ、ひとつは水かお茶でお願いします」
　フランは未成年なので、そのほうがいいだろう。
「ヘイ」
　四つのグラスが置かれ、透明な液体が、なみなみと注がれた。ひとつは水だが。
（あれ？　まさか、僕も乾杯するのか……？）
　どうやら、そういう流れだった。
　レイモンドは震える手をグラスに伸ばす。ところが、横からフランが何の考えもなさそうな勢いでグラスを持っていってしまった。水じゃないやつを。
「ちょっ……フランちゃん⁉」
　彼女はグラスを掲げて。
「はい、乾杯～‼」
「ククク……今年も何も変わらんさ。いつも通りだ。乾杯！」
「フフ……さて、どうでしょうね……乾杯」

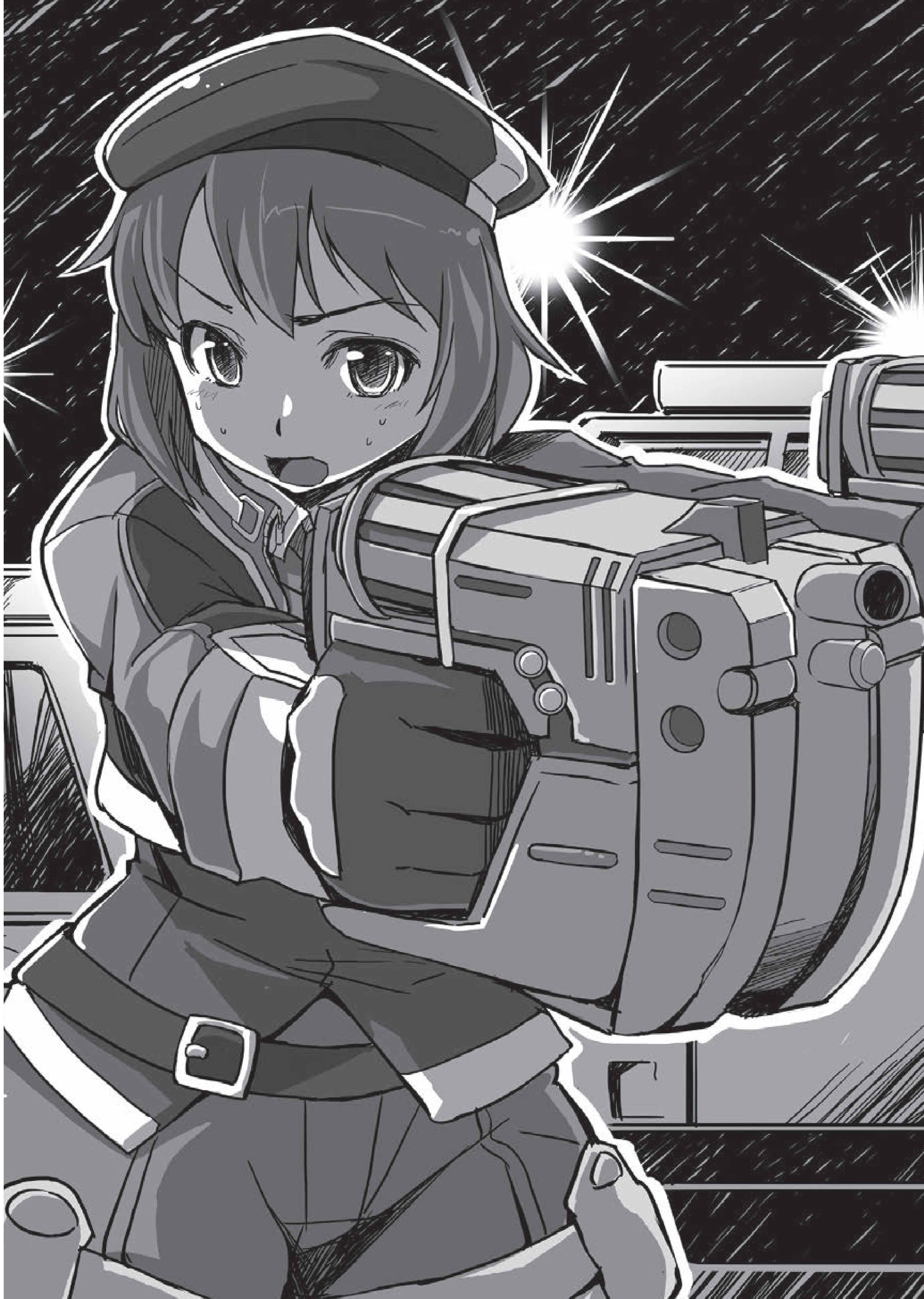
「ちょっ……フランちゃん、こっちじゃないと……」
　レイモンドが水のグラスを彼女に差し出す。そこに、フランが手にしたグラスをゴッと当ててきた。
「かんぱ～～～い！」
「あっ」
　グラスから飛んだ液体が、ガルシアの袖を濡らしてしまう。
「…………」
　彼が目を細めた。
　レイモンドは、心臓が止まった――と思った。
　喉がからからに渇いて、全身の毛穴という毛穴から汗が噴き出す。
「…………すすすすみません、袖に……あ、その……」
　また背中をバンバンと叩かれる。
「あははっ！　なに気にしてるんですか、レイモンドさん！　お祝いの席なんですから、そんな小さなこと言ってちゃらモテましぇんよ～？」
　とうとう、フランは呂律が回らなくなってきた。
　そのまま肩を倒して、もたれかかってくる。
　やわらかくて、いい匂いが……。

（いや、それどころじゃない！）
　この状況を残して、自分だけ夢の国に旅立たれても、とっても困る。
　フランを支え、左右を見た。
　さっきまで、なんだかんだ言って機嫌よさそうにしていたガルシアとツァオが、今にも殺し合いを始めそうな恐ろしい表情をしている。
（な、な、なんだ⁉）
「チッ……」
「どうやら、お遊びはここまでのようです」
　二人が席を立った。
　殺気に満ちた声を交わす。
「ルバーチェ商会に手を出すってことは、覚悟できてんだろうな？」
「惜しいかな、貴方がトップではない。それが、そちらの弱点ですよ」
「うちの会長の悪口ならやめとけや。いろいろと恩があるんでな」
「フッ……」
　こうなったら、もう走って逃げるか？　とレイモンドは考える。
　しかし、フランを置いてはいけない。
（どうしたら？）

　そのとき、まばゆい光が周囲を照らし出した。

　ガチャガチャと金属音をさせて、武装した警備隊が列を成す。
　強烈な光は、警備隊の装甲車からのものだ。
　さらに、大型の導力銃を携えた警察官まで現れた。
　無数の照明を背に、数名が近づいてくる。
　レイモンドは呆然と眺めていた。
　支えていたフランが――どうやら、少し寝ていたらしい。目を開けると、まぶしそうにしつつも。
「あっ、お姉ちゃん⁉」
　叫んだ。
　光のなかを歩いてくる者たちが、駆け寄ってくる。
　そのひとりは、警備隊のノエル・シーカー曹長だった。
「フラン！」
「お姉ちゃん⁉　迎えに来てくれたの？　ありがと～」

「なに言ってるの、あなたが何かの事件に巻きこまれたって聞いて……どういうこと⁉︎」
「事件？　わたしたちは、ラーメン食べてただけだけど……なにかあったの？」
「えっ、ラーメン……食べてたの？　一緒に？」
「うん」
「……マフィアと？」
「なんのこと？」
ノエルと一緒に来たのは、特務支援課の面々だった。
ロイドが、ガルシアとツァオと向き合う。
「これは、いったい？」
「ククク……こっちが聞きたいぜ」
「フッ……私たちは屋台で食事していただけですよ、ロイドさん」
「ええっ⁉︎」
説明を求める視線が、ロイドたちからレイモンドに向けられた。
「ははは……こ、困ったな〜」
おそらくエニグマは、うまく操作できていたのだ。
助けを求める声は受付嬢のレベッカに届いた。
それが、どう伝わったのか……？



結果、港湾区に警備隊の装甲車と、重装備の警察官が列をなしていた。
ガルシアが高笑いする。
「ハッハッハッ！　俺の知らないうちに、屋台でラーメンを食べちゃいけねえって法律でもできたのかよ？」
「私は仕事が残っているので失礼しますよ、ロイドさん」
ツァオが丁寧に頭をさげた。
ロイドは笑みを浮かべる。
「お騒がせして、もうしわけありません。トラブルや事件がなかったのなら本当によかったです。これからも、ずっと、そうありたいものです」
「ククク……小僧が、言うじゃねえか」
「フフ……そうですね、平和が一番です。それでは、またいずれ」
ガルシアとツァオは最後に視線を交わすと、結局はなにも言わずに、それぞれの事務所へと帰っていった。
フランがノエルにへばりついている。
ロイドたちは警備隊と警察に事情を説明しにいった。
「…………」
呆然と立っていたレイモンドのエニグマが、けたたましい音をたてる。

「あ、はい！」
『おい、レイモンド、なにが起きた⁉』
ドノバン警部だ。
かなり怒っている声だった。警察官の誤報で警備隊まで出動したとあっては当然か。
「えっと……屋台で……ちょっとした誤解がありまして～」
『なんだと～⁉』
「す、すみません！」
『ばかもん！　明日までに詳細な報告書を用意しろ！』
「あわわ、明日まで～⁉」
『レイモンド！』
「は、はい！」
『ケガは……ないんだな？』
「あ……はい。あの……大丈夫です……僕もフランちゃんも」
『うむ。それならいい』
「警部……」
エニグマでの通信を終える。
フランはノエルに預けた。ロイドたちが警備隊や警察官への説明をしてくれて、彼らは粛々

と引き上げる。

やがて、何事もなかったかのようにレイモンドだけが残された。

今頃になって、屋台のラーメンの匂いが鼻に絡む。

食べたけど、ぜんぜん味を覚えてない。

「なんか、もったいなかったな～」

振り向くと店主が立っていた。

「ああ、騒がしくしちゃって申し訳なかったね」

「いやいや、それより、お客さん」

「ん？」

「ラーメン三杯と、激辛ラーメン二杯と、ネギラーメン一杯、全部でこんだけなんで」

「……は？」

「まいどありゃっした！」

「ぼ……僕が……？」

「こんだけなんで！　ありゃっした！」

「あ、はい」

差し出された手に、レイモンドは財布からミラを支払う。

すっかり懐が寂しくなった。

あいつら、支払わずに帰りやがった！

警察官になって、これほど悪を憎んだことはない。

ぐっと拳を握りしめる。

港湾区から見える夜のエルム湖へと叫ぶ。

「おのれ、マフィアども！　ぜったいに許さないぞー‼」


FB ファルコム BOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
もうひとつの
『空の軌跡』が始まる――
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！　©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイの HPはこちら
www.field-y.co.jp


FB ファルコム BOOKS
英雄伝説 零の軌跡
四つの運命
著者：田沢大典　イラスト：松竜
特務支援課は
ここから始まった!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
日本ファルコムの大ヒットRPG『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイの HPはこちら
www.field-y.co.jp

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.185プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）

2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）

3：アンケート①『京都ザナドゥ』はプレイした第一印象は？
　アンケート②『京都ザナドゥ』でお気に入りのキャラクターは？

4：希望するプレゼント番号

5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1:『空の軌跡 the 2nd』特集

2:ファルコムニュース

3:啄木鳥しんきのファルコム日和

4:英雄伝説 碧の軌跡 いつか貴方とお茶会を

応募締め切り　8月27日（木）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol. 186

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/